

母校賛歌

能代高

(40)

題字は能代高校長

小林 繁春氏

自由の翼 空高く

そのかみはるか域濶く 尽
くせぬ流れ米代の 水に我等
の聲はしき 若き生命を讃え
つつ 若き生命を讃えつつ

(能代高校歌)

大合唱が、会場いっばいに広がる。やがて、その大きな歌声が、窓の向こうの空遠く吸い込まれて行った。

山上可也先生の顔がある。なつかしい小竹寛治先生の元気な顔も歌っている。吉武栄一同窓

会長、牧野茂治副会長、“花”の

1期生桜田道子らも。

輝く創立五十周年。新校舎完成記念……めでたさ二重奏の祝賀会（十月三日）——いつになく盛り上がったのも当然である。

宴たけなわ、だれいうとなく始まった校歌の合唱。応援歌も声高らかに歌った。

鎌田宏先生（能代市教育長）は、感慨ひとしおのものがあつた。

「そのかみ還し数千年……旧制能中時代の校歌の歌い出

しは、そうだった。

「そのかみはるか……」

戦後、新時代にふさわしい力強い校歌になった。メロディーは昔のままに。推敲に推敲を重ねた壮大な校歌——鎌田先生の汗の結晶だ。

校歌、それ一つにも、能高（能中）五十年の歴史、先人の力が結集されている。

母校誕生の地・樽子山。なんとさわやかなひびき。梅田時春（新7期、県信用保証協会）は、母校近くに住んでいる。

「能代港町・中学校前」——ただそれだけの宛名で、間違いく手紙は配達された。能中と学校周辺の人々が、これほど密接な関係にあった。

昭和十九年校舎焼失。戦後の二十三年再建——混乱期、幾多の苦勞、人知れぬ努力があつた。「校長先生、オラだちどころも

協力さしてけねすか」

18期生が、再建資金の一助にと寄付を申し出た。勤勞動員で得た報酬を、そっくり役立ててほしい……切に学校を思う気持が在校生をも動かした。

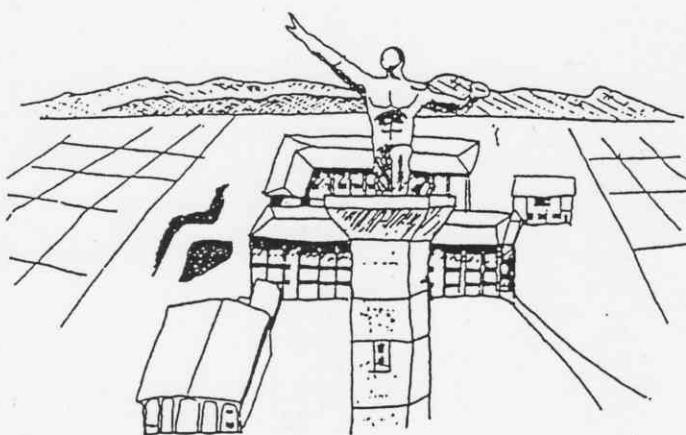
昭和四十九年十一月。能高の歴史に全く新しい一ページが書き加えられた。樽子山から高埕（東能代）へ——。

木造校舎から鉄筋校舎へ……。

能高は、新天地に、新しい生命を宿した。

そして一年。樽子山に根をおろしたあの半世紀前と同じく、高埕の地に、しっかりと根を張りつつある母校。

自在の像——新校舎正面に、能高のシンボルだ。高さが三七メートル。右手は高く天を指さし、理想を求める青年像。小林肇（19期、会社社長、東京）の善意。戸松恭一先生（新11期、



さし絵は平川賢悦（新22期・能代市役所）

能代高校）の熱意で完成した。

常に、ひとつの点に向かって真理を追求してゆく——しかも、自由でかつ自在の“心”を……。

そんな願い、気持を込めて、前校長の鎌田先生が、“自在”の像と名づけた。“栄光”、“自主力行”、“自在”この三つのことばを残して、鎌田先生は母校を去った。

「樽子山の五十年の歴史は、いま完結した。古き輝かしい伝統を踏まえ、新装の学び舎に、新しい栄光の道を築かなければならない……」

五十周年記念式典で、小林繁春校長は、そう語った。

柳谷清三郎能代商工会議所会頭（前能代市長、元能高PTA会長）はいう。

「学校は、一人一人の生徒のよさ、個性をのばしていつてほし

いもんだ。ひとつの“よさ”を持つ人々の集まりが、立派な社会といえるのではあるまいか……」

大先輩の佐々木満（15期、県企画調整部長）もいう。

「高校生は、三年間の間に、青春を完全に燃焼させてほしい。大学入試や就職のための“手段”としないで……」

小林校長は、“誠意”を何よりも大切にする。“随处に主となる”ことを強調する。

これからまた五十年——一世紀への道のりは、決して平らではないだろう。田園の真ん中に移った母校——この冬も吹雪の中に姿を消すことがある。この困難を乗り越えて、精いつぱい若き生命を燃やそう。

校長室に、小畑知事が贈った書。

「雪に耐えて、海花麗し」

終り（敬称略）

母校賛歌

発行

秋田県立能代高等学校同窓会

編集協力

能代高校二十五期(新制七期)有志

発行日

平成十七年一月二十八日

印刷

株式会社 大潟印刷